

## 房総における中期末葉から後期初頭の土器様相

小澤政彦

## はじめに

縄文時代中期末葉から後期初頭の関東地方では大きな社会の変化が起こったと考えられてきた。特に南西関東では、中期後葉に構築された環状集落が崩壊に向かい、中期末葉の加曾利E4式期に遺跡数、遺構数が減少していることが指摘されてきた。今回対象とする千葉県でも中期後葉の加曾利E3式期までに盛行した環状集落が終焉を迎え、加曾利E4式期には「非居住域への分散居住」（加納2002）へと居住形態が変化したと指摘されている。またこの時期には、柄鏡形住居跡と呼ばれる特徴的な住居跡が構築される点や、土偶が出土しないなど、住居形態や儀礼具についても大きな変化が認められる。

ここでは中期末葉から後期初頭における房総の土器様相について検討する。

## 1 関東地方における中期末葉から後期初頭の考え方について

## (1) 研究略史

山内清男は、縄文土器の顔つきの違いと出土層位の検討から、時期、地域の単位として「土器型式」を設定していった。そして全国的に土器型式編年網を整備した（第1図）（山内1937→1974）。山内は、機械的に型式をまとめ、大別5期を設定した。すなわち早期、前期、中期、後期、晩期で、これにその後の発見や研究から草創期が加えられ、現在では大別6期となっている。つまり大別の6期は、絶対的な時間幅によって分けられたものでも、文化や社会の様相を反映して設定されたものでもないことに注意が必要である。以下にやや雑駁ではあるが、この時期の関東地方の土器の研究史を概観する。

上述のように山内によって土器型式編年網が整備され、加曾利E式は中期の後半に、そして後期初頭には堀之内内式が位置づけられた。これは関東地方の中期の土器型式として加曾利E式、後期の土器型式として堀之内内式が位置づけられ、大別の境界がここに設定された。

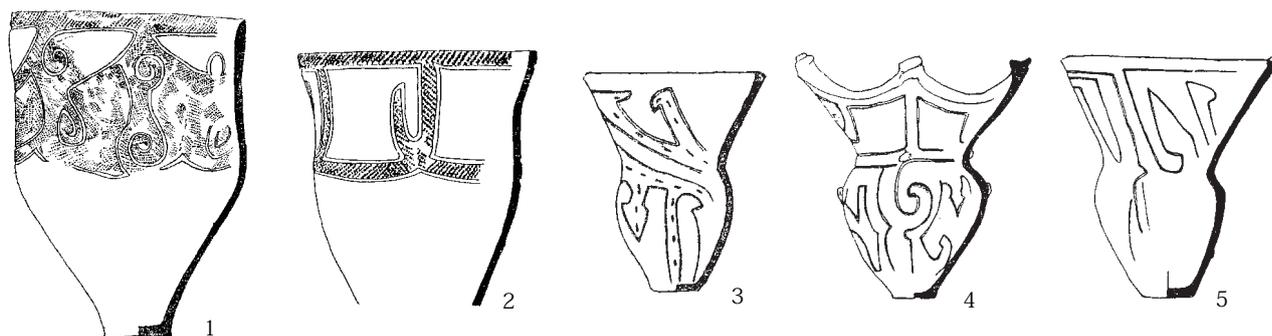
1950年代に発掘調査された神奈川県横浜市称名寺貝塚から出土した一群の

編 織 土 器 型 式 の 大 別

	渡 島	陸 奥	陸 前	關 東	信 濃	東 海	畿 内	吉 備
早 期	住吉	(+)	槻木 1 ◇ 2	三戸・田戸下 子母口・田戸上 茅山	曾根? × (+)	ひじ山 粕 畑		黒 島 ×
前 期	石川野 × (+)	圓筒土器 下層式 (4型式以上)	室濱 大木 1 ◇ 2 a,b ◇ 3-5 ◇ 6	花積下 蓬田 關山 式 黒濱 諸 磯 a,b 十三坊臺	(+) (+) (+)	鉢ノ木 ×	國府北白川 1 大歳山	磯ノ森 里木 1
中 期	(+) (+)	圓筒上 a ◇ b (+) (+)	大木 7a ◇ 7b ◇ 8 a,b ◇ 9,10	御領臺 阿玉臺・勝坂 加曾利 E ◇ (新)	(+) (+) (+) (+)			里 木 2
後 期	青柳町 × (+) (+) (+)	(+) (+) (+) (+)	(+) (+) (+) (+)	堀之内 加曾利 B " 安行 1,2	(+) (+) (+) (+)	西尾 ×	北白川 2 ×	津雲上層
晩 期	(+)	(+) (+) (+) (+)	大洞 B " B-C " C1,3 " A,A'	安行 2-3 " 3	(+) (+) (+) (+)	吉胡 × " ×	宮瀧 × 日下 × 竹ノ内 ×	津雲下層

註記 1. この表は假製のものであつて、後日訂正増補する筈です。  
2. (+)印は相當する式があるが型式の名が付いて居ないもの。  
3. (×)印は型式名でなく、他地方の特定の型式と關聯する土器を出した遺跡名。

第 1 図 山内清男が示した全国の土器型式の編年表（山内1937→1974）



(1、2 称名寺式第一群土器、3～5 称名寺式第二群土器)

第2図 称名寺式土器の標式資料 (吉田1960) (縮尺不同)

土器について、発掘調査を行った吉田格によって、「称名寺式土器」が設定された(第2図)。この土器は、西日本系土器の影響を受けて成立したと考えられており、関東地方の後期初頭に位置付けられた(吉田1960)。

称名寺式土器は、資料蓄積がなかなか進まない中で、型式としての独立性が疑われた(金子ほか1958、安孫子1971、柿沼1973)。これは資料も少ない中で、加曽利E式に伴って出土する点などから、独自の時間幅を持たないと考えられたためである。一方で山内は、称名寺式土器を1969年に示した編年案に称名寺式を後期初頭に置いている(山内1969→1974)。

1970年代後半には、資料蓄積とともに研究が進み、称名寺式が型式として確立したと共に編年案が示された。この時期の主な論文としては今村啓爾(1977)の論文が挙げられる。今村は、西日本、関東、東北の広域的な視点から、称名寺式は中津式の侵入により成立すると考え、3細別の編年を提示した。この論文の中で今村は、加曽利E式と称名寺式が共存しないとしたが、後の論文で称名寺式成立後も加曽利E式が存続していることを認め、「続加曽利E式」と呼称することを提案した(今村1981)。笹森健一は、志久遺跡8号住居から出土した称名寺式土器と加曽利E式土器を検討する中で、器形や成形技法に注目しつつ加曽利EIV式の文様が施されている土器が、称名寺式の成形技法で製作されている指摘した(笹森1976)。笹森の他にも「縄文中期土器群の再編」(埼玉編年)の中で、中期末葉の土器群を検討する中で、今後の検討が必要としながらも称名寺式成立後も加曽利E式が残存している(谷井1982)と述べており、1970年代後半から1980年代においては、称名寺式土器が成立しても、関東地方在地の中期の土器型式である加曽利E式が残存していくことが、共通認識となっていくことが読み取れる。

1985年には、称名寺式土器の交流研究会が開催された。このシンポジウムは、後期初頭土器群の研究において、重要な成果と位置付けられている。この中で、稲村晃嗣が中期末葉から後期初頭にかけての加曽利E式土器について、その型式的特徴を検討した(稲村1990)。またこのシンポジウムでは、石井寛により称名寺式土器の研究史がまとめられ(石井1990)、鈴木徳雄により7細分の変遷が示された(鈴木1990a)。このシンポジウムの後、石井は称名寺式土器の3大別7細分段階の編年を提示し、鈴木も称名寺式土器の編年と文様に関する詳細な検討を進めた(鈴木1990b、2007など)

1990年代には称名寺式土器の7細分の編年、加曽利E式土器が称名寺式成立後に残存するだけでなく、称名寺式土器の変遷に大きな影響を与えていたことが示された。

その後も資料蓄積の進展と共に、研究会が開催され、検討が進められてきた。2007年には「縄文セミナーの会」で、中期末から後期初頭の各地の様相が検討された。この中で鈴木徳雄は、称名寺式7細分の編年

を捉えなおすと共に、称名寺式に伴う加曽利E式土器の特徴を検討した（鈴木2007）。この縄文セミナーの会では、討論の内容が記録されており、称名寺式に伴う加曽利E式土器の呼称についても様々な意見が交わされた。

2013年には「関東甲信越地方における中期／後期変動期—4・3ka イベントに関する考古学現象」とされる公開シンポジウムが開催され、当該期の土器の特徴や社会様相について検討された（千葉2013など）。

また2016年には企画展「称名寺貝塚」関連シンポジウム「称名寺貝塚と称名寺式土器」が開催され、関東から東海、近畿地方をフィールドとする研究者が発表を行い、後期初頭の様相が検討された（横浜市歴史博物館2016）。

以上、雑駁ながら当該期の研究の流れをまとめた。紙幅の都合上、各研究の内容を掘り下げた記述が出来なかったが、称名寺式成立後にも加曽利E式が残存していること、そして称名寺式の変遷に影響を与えていくことが共通認識となっていったという研究の流れを確認した。

## （2） 関東地方及び周辺地域の中期末葉から後期初頭の捉え方について

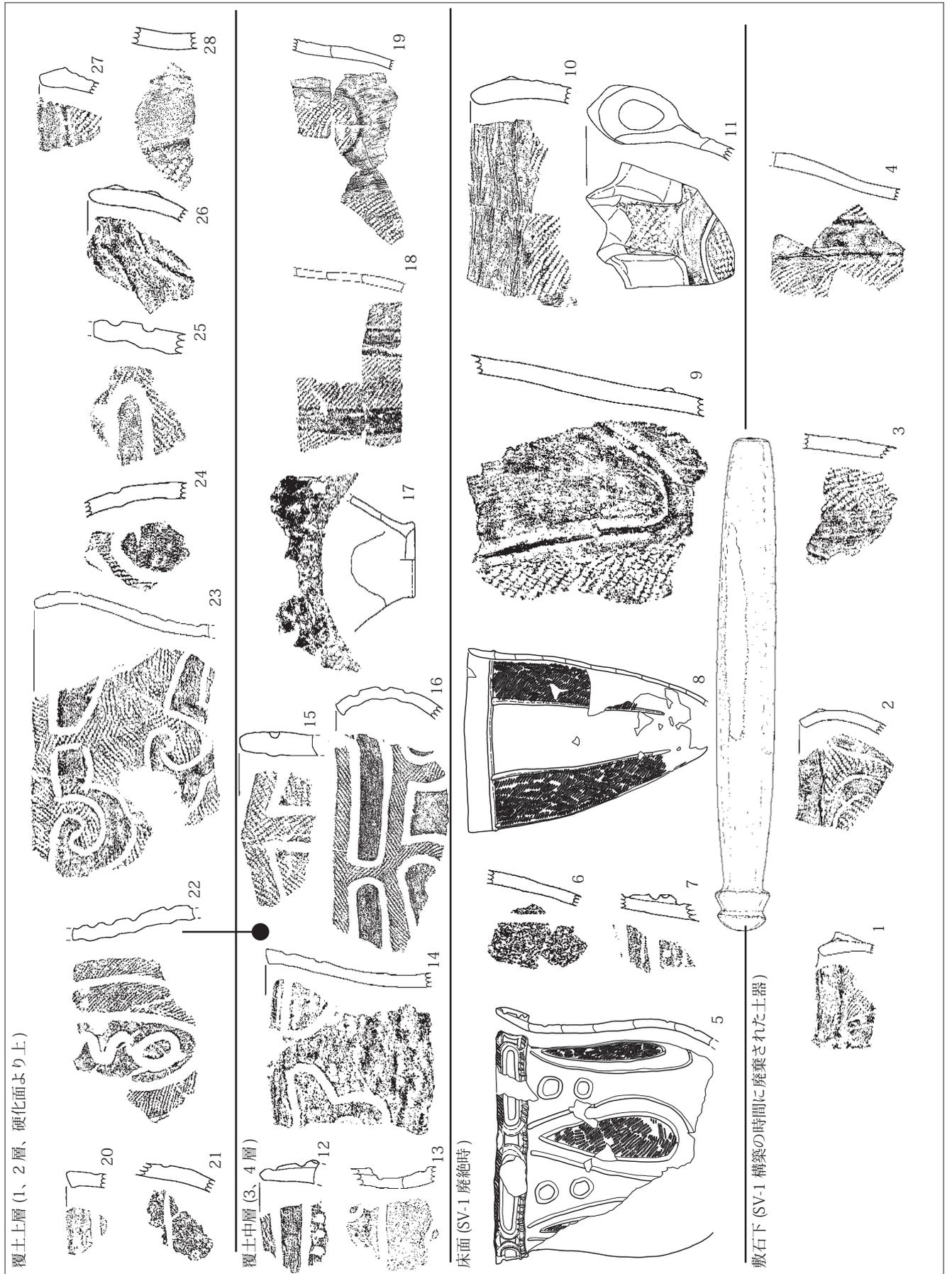
### ①近畿、東海地方

近畿地方から東海地方では、中期末葉の土器が北白川C式、後期初頭の土器が中津式とされており、磨消縄文の成立をもって中津式の成立と考えられている（玉田1990、鶴飼2016、石田2016など）。その変化は漸移的であり、個体資料を見ていくと、判別が難しい土器も存在する。加納実は、北白川C式から中津式への変化について、すべての北白川C式の類型が中津式へ変化するのか（一部の土器が、磨消縄文を持たず中期と同じ顔つきで後期まで残存してしまったり、形骸化、粗製土器に転化してしまう可能性もある）という問題提起を行っている（加納2012、2013など）。これについては当該地域で、未だに解決できていない重要な課題である。

### ②関東地方

関東地方においては、上述のように中期に加曽利E式土器、後期に称名寺式土器が設定され、研究が行われてきた。ここで重要になってくるのは称名寺式の成立の問題である。現在では西日本系土器の出現をもって後期初頭と捉えているが、称名寺式古段階（第1、2段階）に伴う加曽利E式は、中期末の加曽利E4式の様相が強く、ここから称名寺式第1、2段階を中期末に含めて考え、第3段階以降を後期初頭と捉える考え方もできる。特に東京都緑川東遺跡では中期末後期初頭の大別の問題を多く含んでいた。SV-1とされた遺構の床面の土器は「加曽利E V式」(1)（第3図8）、伴ったのは近畿地方の中期末葉の土器型式である北白川C式4期の様相を持つもの（第3図5）であった。またこの遺跡で出土した称名寺式第1段階の土器付着炭化物の較正年代は、小林謙一が従来縄文時代中期末としていた年代であった（小林ほか2014）。以上の様相をもって西日本系土器の東進とその影響が強い土器が制作される段階を中期末として捉えることは可能であり、この立場は石井も認めるところである（石井1992）。

その一方で称名寺式土器研究はその設定当初から、称名寺式第1段階を後期としてきた。鈴木はこの研究史を重視すると共に、標式資料の位置づけを動かすことを批判している（鈴木2007）。また石井は、松風台遺跡3号住居の資料から第1段階にすでに中段連結する2段J字文（今村の称名寺I式b類）が存在しており、すでに中津式から独立した状況が見て取れると考え、第1段階を中津式ではなく、称名寺式と捉え、



第3図 東京都国立市緑川東遺跡 SV-1出土土器 (小澤2016)

後期初頭であるとする立場をとっている。発表者も研究史に則り後者の立場をとり、西日本系土器の関東での出現をもって後期初頭とするという立場をとる。

緑川東遺跡例では、西日本の中期末葉の様相を強く持った土器が、顔つきをほとんど変えずに後期初頭に下っていると捉えた。しかし今後、加曽利E4式に伴って北白川C式4期の土器が出る可能性も否定できない。その場合、西日本系土器の出現をもって後期初頭とするという立場でどう捉えるのか課題となるだろうが、現状ではそのような例は関東では認められていない。

### ③南東北地方

中期末葉の土器型式として大木10式が設定されている。南東北地方にあたる福島県では称名寺式が出土するが中段階以降のものが多く、古段階のものはほとんど出土しない。そのため、称名寺式の古段階は大木10式に並行すると考えられている（大河原2003）。称名寺式中段階と伴出する在地土器の呼称や、綱取式成立の問題については様々な見解がある。相原淳一は、大木10式を後期初頭に位置づける見解に対し、土器型式の認定自体に問題があるとしている（相原2009）。研究者間の大木10式の範疇が異なることから、中期と後期の土器の位置づけにズレが生じていると考えられる。

#### （4）中期と後期の大別の境の問題（2）

以上、各地における大別の境の捉え方を概観し、各地で抱える課題について述べた。各地の大別の捉え方を比較していくと、既に齟齬が生じていることがわかる。近畿、東海地方では磨消縄文を持つ土器の出現をもって後期初頭としている。関東地方でも同様である。しかし関東の中でも称名寺式古段階には南西関東地方に多く分布するが、あくまでも客体的な存在であり、主体は加曽利E式である。そして称名寺式第3段階に至り、北関東も含め分布域を広げていき、加曽利E式にとって代わっていく様相が認められる。今回扱う房総の中期末葉から後期初頭においても、その様相が顕著に認められる。そしてこの段階から後期と捉える見方もできることは既に述べたが、その場合、近畿、東海地方では既に後期初頭の中津式が成立しており、齟齬が生じてしまう。その一方で南東北地方では、称名寺式古段階の土器はほとんど出土せず、称名寺式中段階以降のものが少量出土するにとどまっている。このことから中津式、称名寺式の成立という画期を南東北地方で見出すのは不可能である。東北地方の後期初頭の捉え方で関東地方を見るならば、後期初頭は称名寺式中段階頃となり、西日本では中津Ⅱ式となる。このように大別の境界を各地方で細かく見ていくと、各地の土器研究が抱える課題と各地域間の編年対比の難しさがわかる。

21世紀に入ってからには理化学分析の発展も目覚ましく、特に放射性炭素年代測定法による成果は土器研究に新たな視点をもたらした（小林2004、2017など）。今後この大別の境界については、各地で土器の研究を進めていくと共に放射性炭素年代測定法をはじめとした理化学分析のデータを合わせて蓄積していく必要があるだろう。

## 2 房総における中期末葉から後期初頭の土器様相

### （1）加曽利E式終末の特徴について

称名寺式成立後にも残存する加曽利E式終末期の土器について、その呼称については議論がなされてきた。上述したとおり、今村は「続加曽利E式」を提案した（今村1981）が、型式内容まで踏み込んだ検討

はなされなかったため、この呼称は一般化しなかった。稲村は、この時期の加曽利E式を検討する中で、「加曽利E式に続くもの」という呼称を用いている。その後、石井が称名寺式土器の編年の検討を行う中で、「加曽利E V式」の呼称を使用した。加曽利E IV式との弁別が困難な個体が存在する点、細別呼称が混乱している中でさらなる混乱を招くなどこの呼称における問題点も指摘している（石井1992）。稲村以降、石井（1992、2015）、鈴木（2007）、江原英（2007、2016）、千葉毅（2009、2013）、上野真由美（2013）がこの土器群の型式内容を検討しており、その特徴や捉え方の研究が進展してきた。一方で、この土器群の特徴について、明確に文章化されていない部分も多いため、ここで特徴をまとめておきたい。そのため、この特徴の抽出は発表者にプライオリティがないことを強調しておきたい。

この時期の加曽利E式は、稲村が文様構成の違いから「対向U字交錯文類型」（第4図1・2）、「渦文逆U字交錯文」（第4図3）、「併行垂下文類型」（第4図4）の3つの類型に分けている。施文手法は沈線または隆線であるとし、そこから「胴部文様の上下2帯化」、「単位文の生成」、「区画文の生成」、「帯縄文化」、「下部文様連繫」の変化があると述べている。

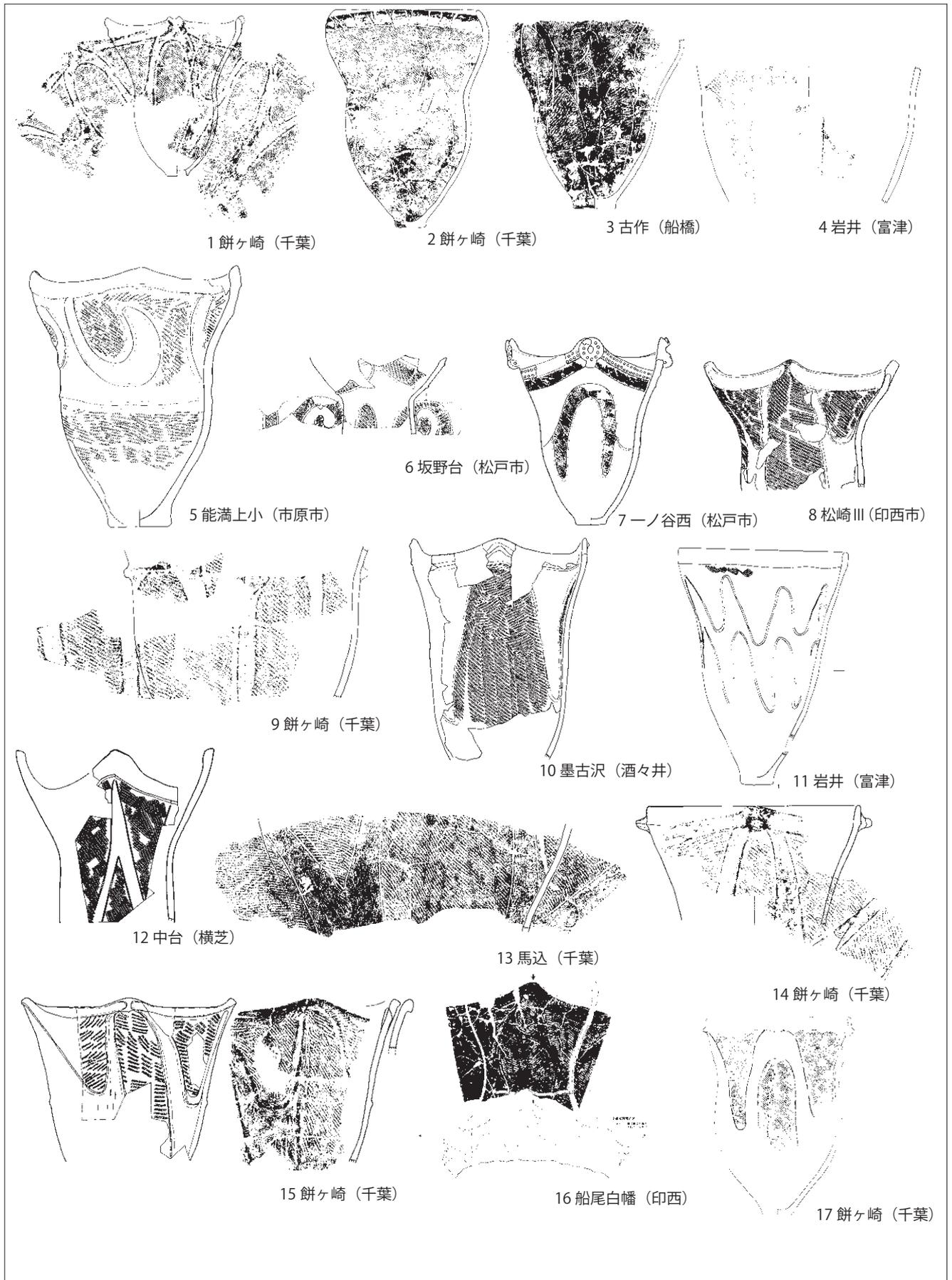
こうした文様の変化について、以下にまとめておく。

- ①胴上部と胴下部の文様が分帯され2帯化する「胴部文様の上下2帯化」が認められるものが出現する（第4図5・6）。関沢類型もこの変化の概念に含まれるものである。
- ②器面を区画するように縦位の単位文や区画文を持つ傾向が認められる（第4図8）。対向U字交錯文類型に多い。
- ③文様の一部を帯縄文で表現するものが出現する（第4図7）。
- ④加曽利E 4式では、開放されていた文様の下端部を横位に連繫するようになる「下部文様連繫」をもつものが現れる（第4図10）。横位連繫は称名寺式または東北地方大木式の影響と考えられる。
- ⑤従来口辺部が屈曲するキャリパー形であったものが、直線的に立ち上がるようになる（第4図12など）。
- ⑥対向U字交錯文類型の胴部文様が口縁部を区画する横位の文様に接触する、もしくは口縁端部まで突き抜けるようになる（第4図14）。また隆線で施文されるものには接触した部分は突起状になることがある。
- ⑦「対向U字交錯文類型」が上下で対向する部分にずれが生じてくる。
- ⑧対向U字文の部分が、胴中部で接触しX字状になる（第4図9）。連結した部分は突起状になることがある。
- ⑨沈線で文様が施されるものは、沈線幅が細くなる傾向がある（第4図13）。
- ⑩隆線貼り付け後に縄文を施文するのが特徴であるが、縄文施文後に隆線脇や隆線上をナデ消さない傾向がある（第4図15など）。
- ⑪文様構成に乱れが認められることが多い（U字文の区画が乱れる、一個体の中でU字文同士の大きさが異なるなど）（第4図11・16・17）

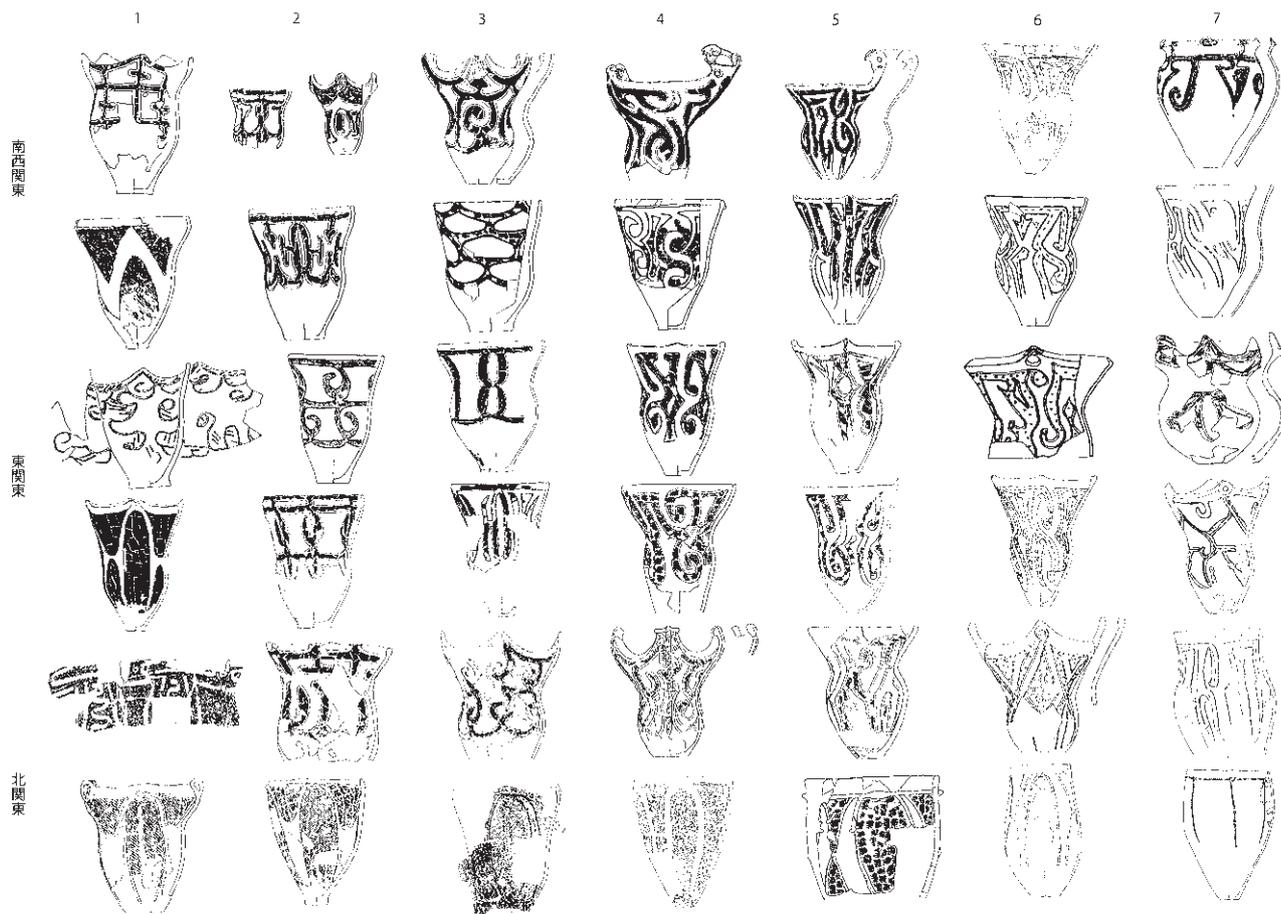
以上のような特徴が1個体の中で複数認められる。①～⑧の特徴が認められれば、「加曽利E V式」の可能性が高いと考えられる。一方で⑨～⑪は、そのみの特徴をもって判別するのは危険であり、複数の特徴が認められたり、遺構内でどのような土器が伴うかなども考慮した上で、判別することも多い。

## （2）房総における中期末葉から後期初頭の土器様相

ここでは房総における中期末葉から後期初頭の土器様相について述べていく。加曽利E式成立当初に認められた地域差は、時期が下るにつれて解消されていく方向に向かう。しかし中期末葉から後期初頭にお



第4図 房総における加曾利E式終末の土器 (縮尺不同)



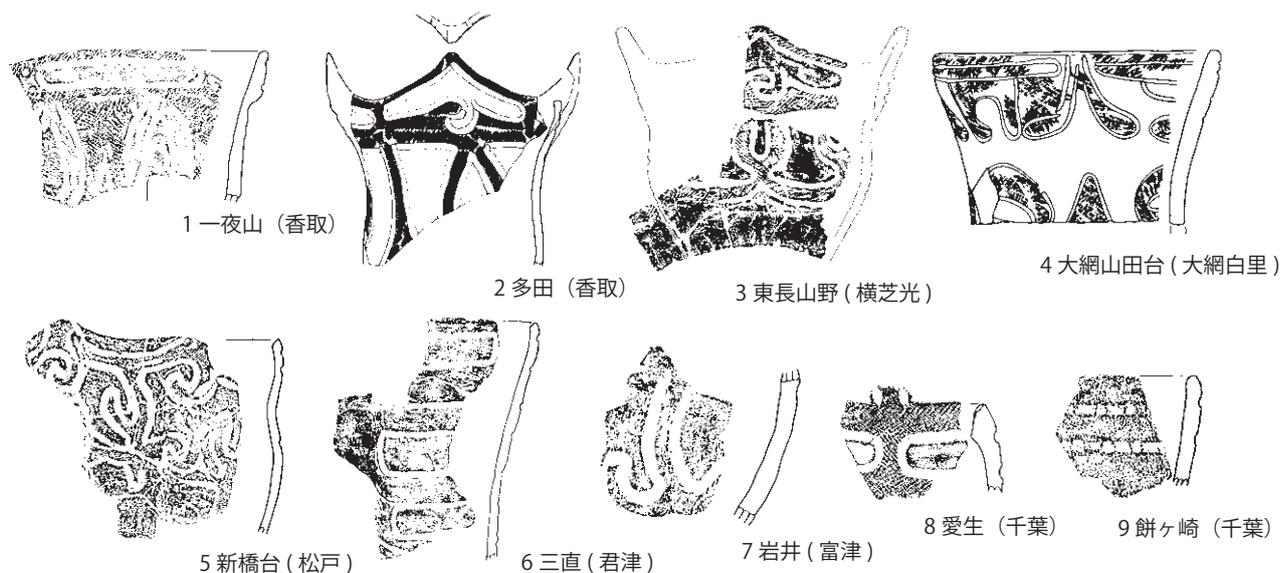
第5図 関東地方における称名寺式土器の7段階区分（称名寺式土器検討会2017）

いても、地域差を見出すことが出来る。まず房総地域において、「併行垂下文類型」はほとんど出土しない点が挙げられる。現状では富津市岩井遺跡で認められるもののみである。また前の時期の様相を引き継ぎ、文様は隆線で描かれることが多く、「対向U字交錯文類型」が主体を占める。この他にも称名寺式と加曾利E式の折衷土器と捉えられる関沢類型が他地域に比べ、ほとんど出土しないことが特徴的である。次に各時期の様相について見ていく。なお編年については称名寺式の7細別の段階編年を使用する（石井1992、鈴木1990b、2007、称名寺式土器検討会2017）。

### ①称名寺式第1段階

西日本系土器（第6図）の出現をもって後期初頭としているが、房総地域を含む東関東地方では、西日本系土器の出土は南西関東に比べ少ない。加納は、関東南西部の土器様相を踏まえた上で、東関東における土器様相について「関東南西部での契機を踏まえた二次的な受容、すなわち関東南西部から東関東への波及と考えることができる」（加納2016：P87）と指摘している。房総地域においては、西日本系土器の出土は限定的なため、遺構内で「加曾利E V式」と考えられる土器に伴わない例も多い。またこの時期の「加曾利E V式」は加曾利E 4式と弁別が困難なものも存在し、加曾利E式のみで称名寺式第1段階に下っているかは判断しづらい。

この時期の例として、六通貝塚 SI-005を挙げておきたい（第7図1～11）。1・2は住居跡の埋甕で、「加曾利E V式」と考えられる。いずれも「対向U字交錯文類型」である。2は無文部が「Y」字状になっており、やはり称名寺式第1段階に伴うものと考えられる。3～6は加曾利E式である。3は口縁部が立ち上がる器



第6図 房総における称名寺式第1段階の土器（縮尺不同）

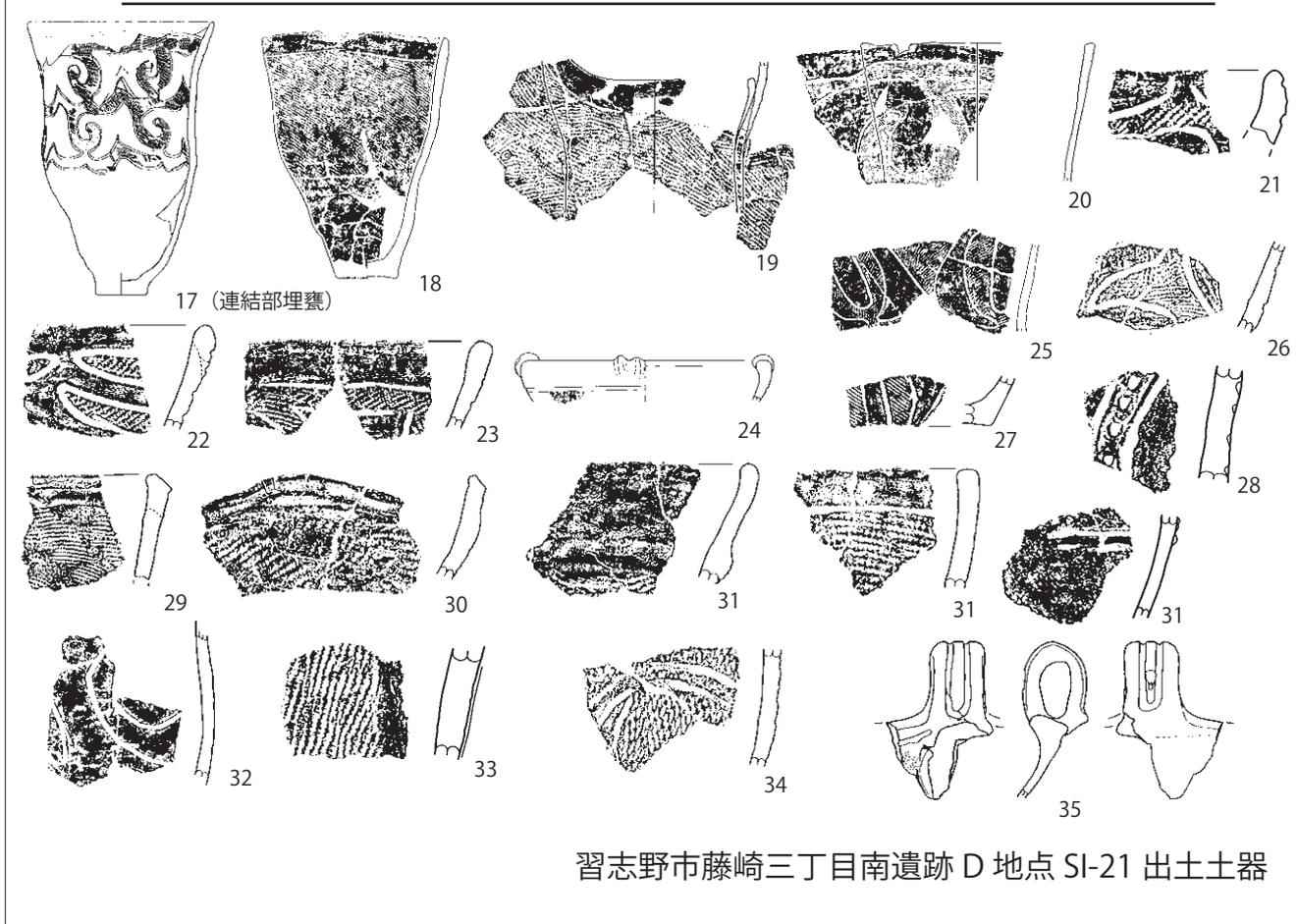
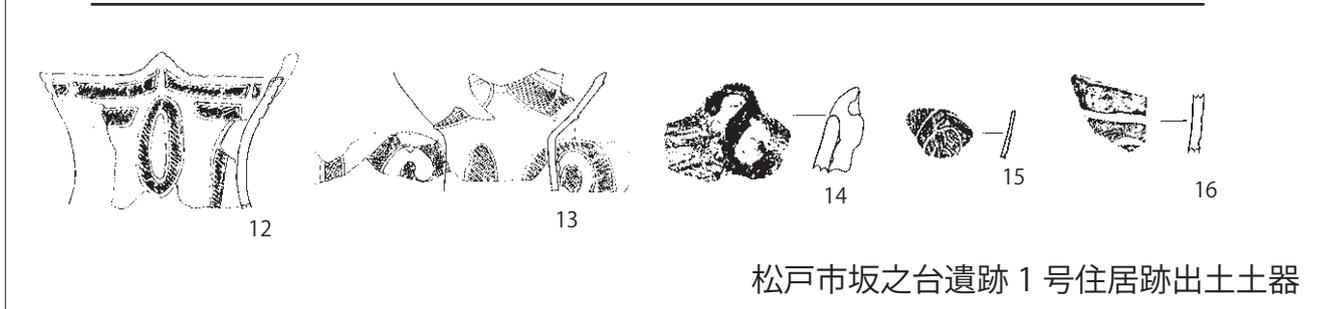
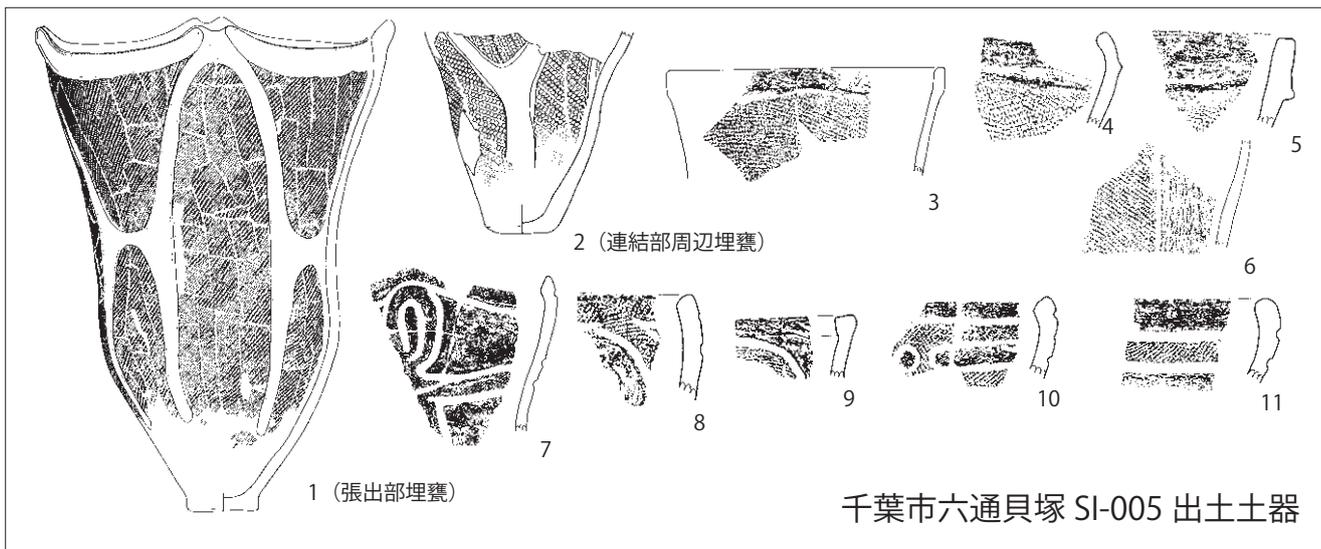
形であり、新しい様相を示している。7～11は称名寺式第1段階の土器である。7は口縁部文様が明瞭に残っており、沈線のみで文様が施される。西日本系土器の様相を強く残す。10は口縁部文様にやや乱れが認められる。11は口縁部文様がすでに消失していると考えられ、これら破片の中でも少し時間差が認められる。

## ②称名寺式第2段階

この時期には、西日本系土器の在地化による変容と、「中段連結2段J字文類型」が認められる。千葉県内でも千葉市餅ヶ崎遺跡J41号住居址の埋甕がその典型例である。この住居跡に伴う加曾利E式土器は、称名寺式第1段階のものと大きな差異はない。この時期には「関沢類型」と呼ばれる特徴的な土器が出土する。ここでは松戸市坂之台遺跡1号住居跡出土土器を取り上げる（第7図12～16）。12は窓枠状区画と紡錘文が施される称名寺式第2段階の土器である。口縁部の窓枠状の区画内とその真下に帯縄文が施されており、第6図に示した土器に比べ文様に変化していることが確認できる。13は関沢類型と考えられるもので、この段階に出現する称名寺式と加曾利E式の折衷土器である。14、15は加曾利E式、16は称名寺式である。

## ③称名寺式第3段階

この段階に至り、関東地方一円に称名寺式の分布が広がっていく。これは西日本系土器の在地化が進んだ結果と評価されている（石井1992）。房総地域においても、この時期には称名寺式土器の出土量が増え、加曾利E式に置き換わっていく様相が認められる。この時期の加曾利E式は、縄文のみが施文されるものが多く、文様の変遷がうまく追えない状況にある。ここでは習志野市藤崎三丁目南遺跡D地点SI-21を取り上げる（第7図17～35）。17は住居跡の埋甕で、「中段連結2段J字文類型」（石井1992）の称名寺式第3段階である。20～28は称名寺式である。28は列点が施される称名寺Ⅱ式であり混入と考えられる。18・19・29～35は加曾利E式である。18・19は口縁部が沈線で区画され、胴部に縄文が施される。35は加曾利E式の把手である。



第7図 房総における称名寺式第1段階から第3段階の土器 (縮尺不同)

#### ④称名寺式第4段階

称名寺式第4段階では、「縦位構成2段J字文類型」(石井1992)が盛行する。ここでは餅ヶ崎遺跡J46号住居跡出土土器を取り上げる(第8図1～30)。1は「縦位構成2段J字文類型」の典型例で、第4段階の土器である。2～4・10は称名寺式古段階と考えられ、混入と考えられる。5～9・11～13は称名寺式中段階と考えられる。特に9・11・12は無文部と帯縄文部の面積を等しくする「帯状等分割構成」が認められる(鈴木1990b)。14は加曽利E3式と考えられる。15～30は加曽利E式終末の土器である。房総地域においては、この段階の称名寺式に伴う加曽利E式の個体資料がほとんど認められない状況になるため、加曽利E式がどのような顔つきをしているのか不明瞭な部分が多い。

#### ⑤称名寺式第5段階

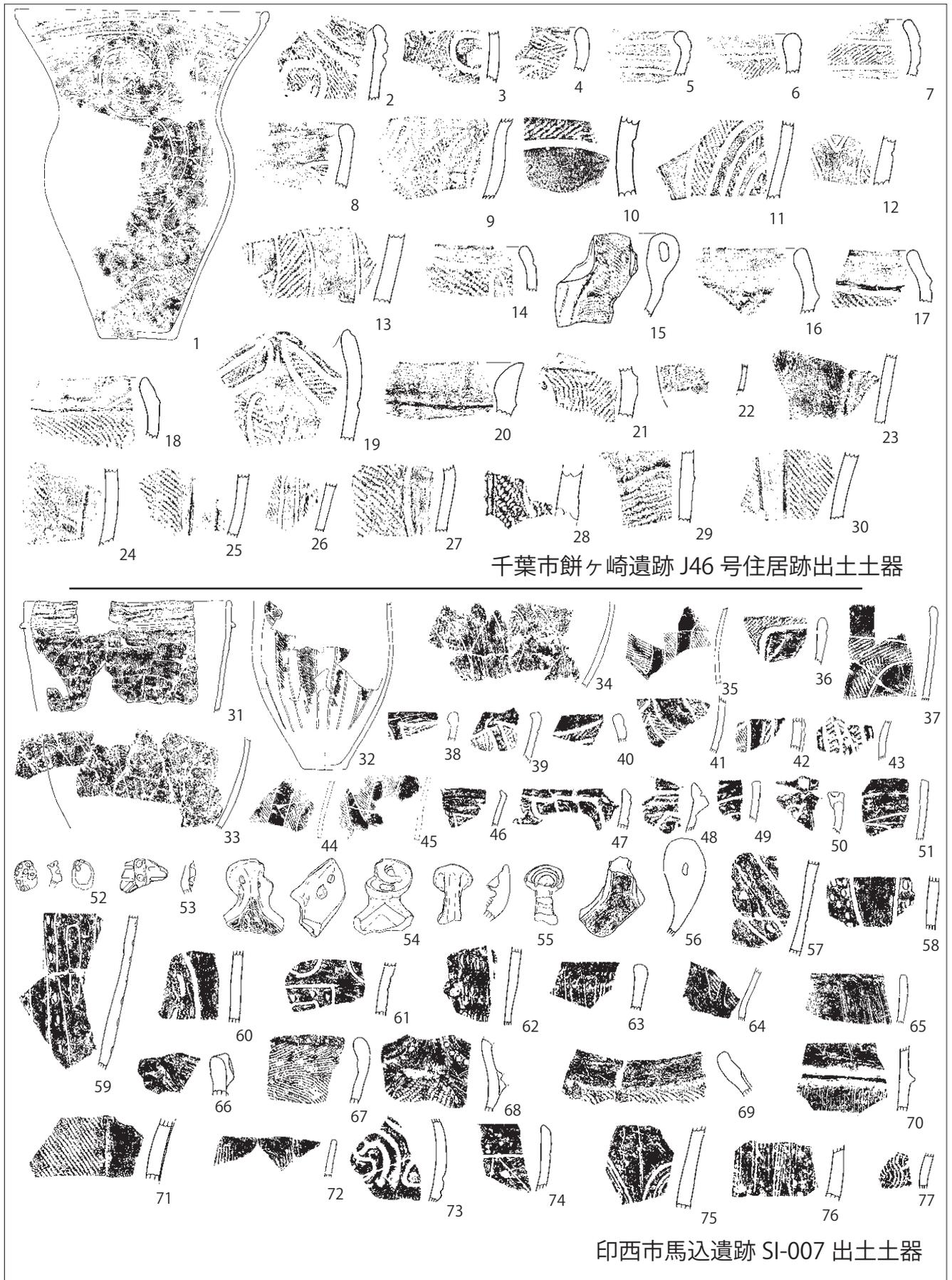
称名寺式第5段階は、称名寺I式の終末にあたり、それまでの2段J字文の下端区画が開放し、文様構成がより複雑化していく。ここでは印西市馬込遺跡SI-007出土土器を取り上げる(第8図31～77)。このうち32から61は称名寺式である。32は帯縄文で文様が施され、下端区画が開放されていることから称名寺式第5段階と考えられる。33・34は沈線と縄文で文様が施されるが、文様構成が複雑化している様相が認められる。35～45は称名寺I式、46～51・57～61は沈線と列点が施される称名寺II式である。52～56は口縁部に付される把手や突起である。称名寺I式終末からII式にかけてのものである。31・62～77は加曽利E式土器である。31は称名寺式第5段階に伴う「加曽利E V式」である。口縁部が隆線で区画され、胴部には櫛歯状工具による条線が施される。この他にも74は細い沈線のみで文様が施されることから、この時期の「加曽利E V式」と考えられる。

#### ⑥称名寺式第6段階

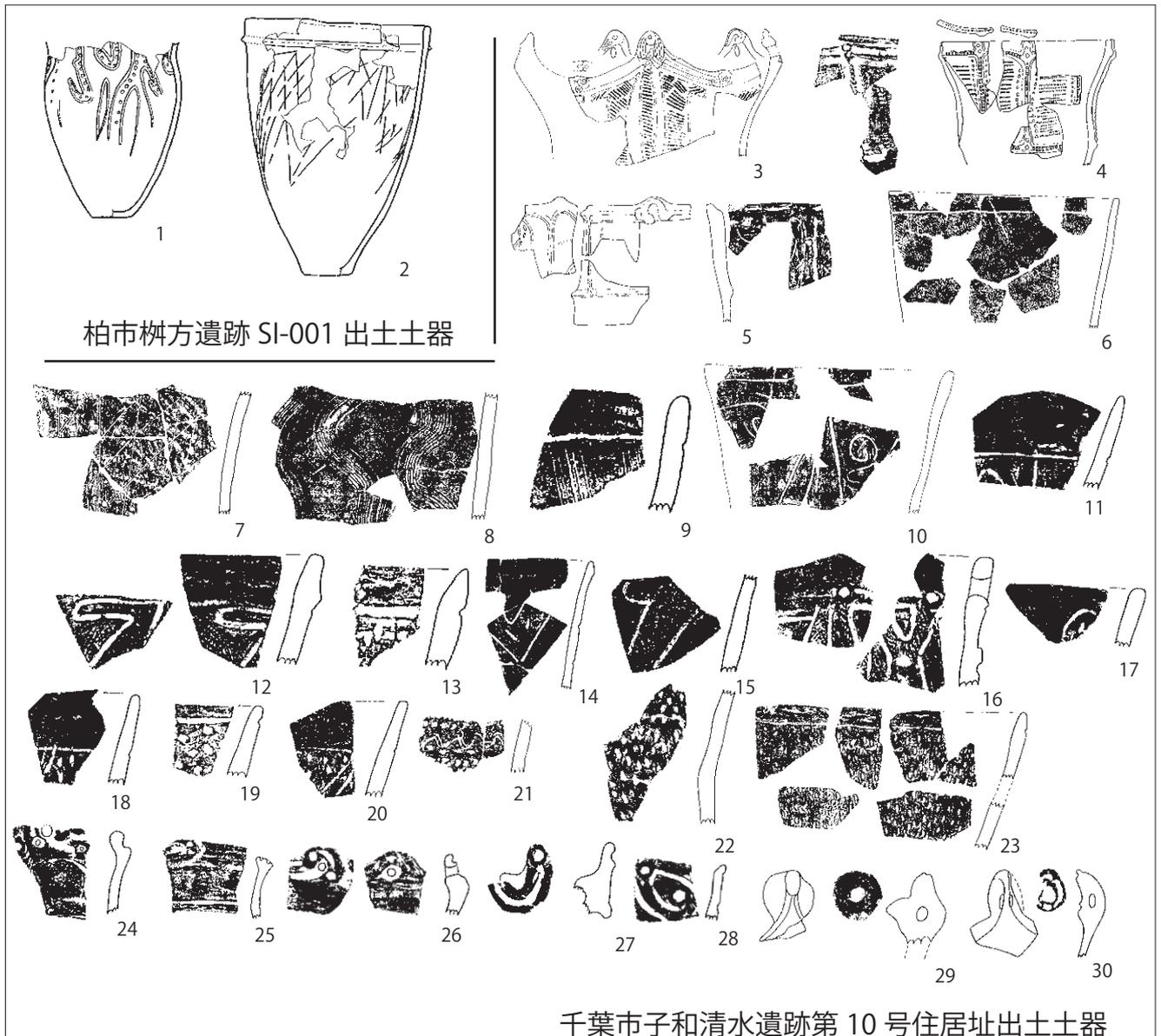
この段階から称名寺II式となる。この段階から、文様が帯縄文から列点に変化する。ここでは柏市榎方遺跡SI-001出土土器を取り上げる(第9図1・2)。1は称名寺式第6段階の土器である。沈線と列点による文様が認められる。2はこの時期に伴う「加曽利E V式」である。口縁部には隆線が施され、胴部には細い沈線で格子目状の文様が施されている。房総地域では称名寺式中段階(称名寺第4・5段階)で加曽利E式の出土量が減少し、個体資料がほとんど認められない状況になるが、この段階に再びこのような土器が認められるようになる。

#### ⑦称名寺式第7段階

この段階は称名寺式終末期にあたる。称名寺式は沈線のみのもものが認められるようになり、文様構成も乱れたものが出現する。ここでは千葉市子和清水遺跡第10号住居址出土土器を挙げる(第9図3～30)。3は称名寺式第7段階である。文様は帯縄文で施されるが、文様構成は縦位方向に伸びていると考えられる。口縁部には貫通孔を持つ特徴的な貼付文が施されており、この段階の特徴を表している。4・5は東北系の土器である。胴部下端を隆線で区画され、方形の区画が認められる。6～11は「加曽利E V式」と考えられる。6・10はこの段階の様相を示すものと考えられる。6は沈線で口縁部が区画され、櫛歯状工具による条線のみが施される。10は沈線で口縁部が区画され、渦巻文などの文様が施される。7は細い沈線で格子目状の文様が施されるもので、第6段階にも認められたものである。この段階にも変化せず残存している



第8図 房総における称名寺式第4段階から第5段階の土器（縮尺不同）



第9図 房総における称名寺式第6段階から第7段階の土器（縮尺不同）

可能性を示している。12～17は称名寺式土器である。沈線と縄文、または列点で文様が施される。18～23は列点が施されるものである。24～30は特徴的な突起、把手である。

### おわりに

以上、中期末葉から後期初頭にかかわる課題に触れつつ、房総における中期末葉から後期初頭の土器様相について検討した。房総地域においては、加曽利E式終末の「併行垂下文類型」がほとんど出土しない点、また称名寺式との折衷土器と捉えられる関沢類型が少ないという地域の特徴があることを確認した。また称名寺式成立期の段階では、加曽利E式が主体であること、西日本系土器の出土はかなり限定的であることを確認した。そして称名寺式第3段階に至り、加曽利E式から称名寺式に置き換わっていく様相がみられることを示した。称名寺式中段階になると加曽利E式の出土量が減少し、様相が不明瞭になる。称名寺II式になると再び加曽利E式の個体資料が認められるようになる。またこの段階では千葉市子和清水遺跡や成田市山口雷遺跡のように、東北系の土器が認められるようになる。

今後、加曾利E式の様相についてさらなる検討を進めていく必要がある。特に称名寺式中段階に様相が不明瞭になり、称名寺Ⅱ式になり再び個体資料が認められるという点については、他地域とのかかわりも含めさらなる検討が必要となる。中期末葉から後期初頭については、上述の通り各地で土器型式研究に多くの課題を抱えている。今後もこうした研究を進めていきたい。

## 註

(1) 筆者は加曾利E式の編年は、研究史を踏まえアラビア数字による細別呼称を使用してきた。しかし加曾利E式終末における研究は、ローマ数字による細別呼称を用いて進められてきた経緯があり、「加曾利E V式」という呼称も同様である。現状では「加曾利E IV式」と「加曾利E 4式」の終末は同じと考えており、アラビア数字による編年を用いる筆者が、称名寺式に伴う加曾利E式について、「加曾利E V式」を使うことは、編年上において問題があるとは考えていない。

(2) 大村は、山内の設定した大別の本来の意義について検討し、その内容の変節について考察を行っている。それを踏まえたうえで「後期に下る加曾利E式」という言葉が論理的におかしいのではないかと疑義を呈している(大村2022)。

## 参考・引用文献

相原淳一2009「東北地方における縄文時代中期末葉から後期前葉に関する土器編年—宮城県石巻市山居遺跡の調査成果から—」『東北歴史博物館研究紀要』10、東北歴史博物館

安孫子昭二1971「縄文時代後期初頭の諸問題」『平尾遺跡調査報告書』1 平尾遺跡調査会

石井寛 1990「称名寺式土器に関する研究史」『調査研究集録』第7冊 横浜市埋蔵文化財センター

石井寛 1992「称名寺式土器の分類と変遷」『調査研究集録』第9冊 横浜市埋蔵文化財センター

石田由紀子2016「北白川C式から中津式への変遷とその背景」『称名寺貝塚と称名寺式土器』横浜市歴史博物館

稲村晃嗣1990「加曾利E式系列の土器群」『調査研究集録』第7冊 横浜市埋蔵文化財センター

今村啓爾1977「称名寺式土器の研究(上)、(下)」『考古学雑誌』63-1、2考古学学会

今村啓爾1981「柳沢清一氏の「称名寺土器論」を批判する」『古代』71早稲田大学考古学会

上野真由美2012「加曾利E式土器の終焉と称名寺式土器の関係」『埼玉県立埋蔵文化財センター研究紀要』25号、埼玉県埋蔵文化財調査事業団

鶴飼堅証2016「東海地方の中期最終末から後期初頭の土器群」『称名寺貝塚と称名寺式土器』横浜市歴史博物館

江原英2007「東関東の様相」『縄文中期終末から後期初頭の再検討』縄文セミナーの会

江原英2016「北関東地域の様相」『称名寺貝塚と称名寺式土器』横浜市歴史博物館

大河原勉2003「第1章縄文時代の遺物について 第1節土器」『阿武隈川右岸築堤遺跡発掘調査報告3 高木・北ノ脇遺跡』財団法人福島県文化振興事業団

大村裕2022「IV.「縄文時代の時期区分」と「縄文土器型式の大別」の違い—「後期に下る加曾利E式」という用法は正しいのか—」『続日本先史考古学史の基礎研究—山内清男の学問とその周辺の人々—』

小澤政彦2016「武蔵野・多摩地域周辺の土器系統：称名寺式」『シンポジウム縄文研究の地平2016—新地平編年の再構築—』縄文研究の地平グループ・セツルメント研究会

柿沼修平1973「いわゆる称名寺式土器に関する二・三の疑義」『史観』創刊号 史観同人会

金子浩昌ほか1958『館山鉾切洞窟』千葉県教育委員会

加納実2002「非居住域への分散居住が示す社会—中期終末の下総台地—」『縄文社会論(上)』同成 社

加納実2012「土器型式編年論 中期」『縄文時代』23、縄文時代文化研究会

- 加納実2013「中期末～後期初頭における東西関係について」『関東甲信越地方における中期 / 後期変動期—4・3ka イベントに関する考古学現象③—公開シンポジウム予稿集』
- 加納実2016「関東東部の中期最終末から後期初頭の土器群」『称名寺貝塚と称名寺式土器』横浜市歴史博物館
- 小林謙一2004『縄紋社会研究の新視点—炭素14年代測定の利用—』六一書房
- 小林謙一2017『縄紋時代の実年代—土器型式編年と炭素14年代—』同成社
- 小林謙一・小澤政彦・坂本稔2014「1. 国立市緑川東遺跡出土土器付着物の炭素14年代測定」『緑川東遺跡—第27地点—』国立市教育委員会笹森健一1976『志久遺跡』埼玉県遺跡調査会報告第31集、埼玉県遺跡調査会
- 称名寺式土器検討会2017「シンポジウム「称名寺貝塚と称名寺式土器」の報告」『横浜市歴史博物館紀要』VOL. 21 横浜市歴史博物館
- 鈴木徳雄1990a「称名寺式土器」『調査研究集録』第7冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 鈴木徳雄1990b「称名寺・堀之内1式の諸問題」『縄文後期の諸問題』縄文セミナーの会
- 鈴木徳雄2007「称名寺式土器研究の諸問題」『縄文中期最終末から後期初頭の再検討』縄文セミナーの会
- 谷井彪・宮崎朝雄・大塚孝司・鈴木秀夫・青木美代子・金子直行・細田 勝 1982「縄文中期土器群の再編」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要1982』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 玉田芳英1990「中津式土器」『調査研究集録』第7冊、横浜市埋蔵文化財センター
- 千葉毅2009「加曾利E式土器の終末—異系統土器の貫入・拡散についての基礎研究」『慶應義塾大学大学院文学研究科史学専攻民族考古学分野 平成20年度(2008) 修士論文』
- 千葉毅2013「関東甲信越地方における称名寺式土器と加曾利E V式土器の混在の様相」『関東甲信越地方における中期 / 後期変動期—4・3ka イベントに関する考古学現象③—公開シンポジウム予稿集』
- 山内清男1937→1974「縄紋土器型式の細別と大別」(→『日本考古学選集21山内清男集』築地書館)
- 山内清男1969→1974「縄文草創期の諸問題」『MUSEUM』第224号(→『日本考古学選集21山内清男集』築地書館)
- 横浜市歴史博物館2016『称名寺貝塚と称名寺式土器』
- 吉田格1960「横浜市称名寺貝塚発掘調査報告」『東京都武蔵野郷土館調査報告書』武蔵野文化協会

—メモ—